（公開版）

ポルトガルスタディツアー
元気玉シリーズ:教師と大学関係者が自ら創る海外研修！

第1部　概要

背景：
ポルトガルのMoimenta da Beira 校（ポルトガル北部ヴィゼウ地区）と、福島県立郡山高校、大阪府泉大津市立小津中学校は、2022年12月からOECD Education2030/2040「プロジェクト∞無限大」のパートナー校として、国際共創パイロット事業を開始しました。本事業は、2024年12月、OECD本部(パリ)で開催されたOECD Education2030 プロジェクト∞無限大：生徒教師国際サミットで幕を下ろしました。この間、ポルトガルチームは、パートナーである大阪府泉大津市立小津中学校と、福島県立郡山高校、安積高校を訪問し、交流を図るとともに、東北大震災と復興の歩みを学びました。（参考：こちら1、こちら2）

この度、これまで時差や国境を超えて進めてきた、日本とポルトガルの新しい国際共創、学びのプロセスを振り返り、次のステージについて話し合う場として、Moimenta da Beira 校主催による国際ワークショップを開催することになり、パートナ校である福島県立郡山高校と大阪府泉大津市立小津中学校の教員、また本事業を日本側から支援してきた東京学芸大学のメンバーが招待を受けました。

ポルトガルは、国の戦略としてシティズンシップ教育に力を入れて取り組んでいます。また、Moimenta da Beira 校は、保・幼・小・中・高・特別支援・社会人教育が一体となり、過疎地域における地方創生、学校が地域のハブとしても機能しています。

この貴重な学びの機会を、日本においてより広く還元するため、Moimenta da Beira 校の協力も得て、「ポルトガルスタディツアー」として、コレクティブインパクトを目指して、自己負担での参加者を公募で募りました。

このポルトガルスタディツアーは、みらいの教員研修・海外視察のモデルとなるよう、元気玉シリーズ：教師と大学関係者が自ら創る海外研修！[1]として、E2040チームにもアドバイスをいただきながら、企画・実施しました。

1．本スタディツアーのゴール

ポルトガルの教育の中で、特徴のある下記の事例の実際を学ぶことで、参加者にどのような気づき、変化があったか、変容を明らかにし、未来の教員研修・海外視察への示唆につなげていくことを目指します。特に、**OECDティーチングコンパスの実装**に向けて、教師のエージェンシー、共同エージェンシー、集団エージェンシー、教師のエンゲージメント、教師のコンピテンシー、教師のウェルビーイングに関して、該当する部分（すべてである必要はない）の変化と、スタディツアーを通してどのような学びがその変化をもたらしたのかを、明らかにしたいと考えています。

- シティズンシップ教育
- インクルーシブ・特別支援教育
- 学校の自由裁量とカリキュラムのフレキシビリティ
- 学校クラスターと、学校が地方創生を担う地域のハブとしての機能

2．研修の構成

[1] 元気玉教員研修は、教師が創る教師のための教員研修として、これまで日本OECD共同研究月間の中で、開催しています。
https://gakugei-asobiba.org/archives/2862
https://gakugei-asobiba.org/archives/3044
https://gakugei-asobiba.org/20250103workshop#ws032001

（公開版）

ポルトガルスタディツアーは、事前準備、現地での滞在、報告会の、3つのセッションから構成されます。

事前準備	事前リサーチ	ポルトガル、ポルトガルの教育事情に関して、これまでの共創の中で出された資料・情報を共有しあい、インターネットなどで調査しておく。（Note1)
	国内メンバーによる準備会(2025.4.16開催）	・参加者同士の顔合せ ・各人のツアーへの想い（スタディツアーで何を学び・何を日本に持ち帰りたいか、また日本に戻ってからどのようにその学びをそれぞれの現場で生かして行きたいか）を共有しあう ・各人の想いを実現するために、具体的なスタディツアーの内容を話し合う。 ・マルチステークホルダー（生徒、教師、研究者、事務局）で参加する今回のツアーからの学びを最大化するための方策を話し合う。
	Pre-mini-survey*	・研究者にも協力いただいて簡単なサーベイを作成し、事前サーベイを実施する（参加メンバーである、生徒、教師、研究者、事務局すべてを対象に実施）
	Moimenta da Beira 校との事前打ち合わせ（日程候補：4/23-25)	・公募からの参加者はこれまでポルトガルの学校と面識がないため、ポルトガルの学校関係者と事前に知り合う時間を持ち、オープンに話せる関係を築いておく ・可能であれば、ホームステイ受け入れの生徒たちも含めて、生徒同士で友達になる。 ・スタディツアーの具体的な内容を、その意図も含めてお互いに話し合い、ポルトガル側と合意する。
現地滞在・視察・対話	学校訪問・対話 国際ワークショップ (4/29,30) **"Lessons from Project Infinity: Interculturality, innovation, internationalization, integration, inclusion"**	・対話を大事に、お互いに学びあう場づくりを目指す ・国際ワークショップでは、ポルトガルと日本のここまでの２年にわたる共創についてプレゼンを行い、振り返るとともに、未来のパートナーシップを構想する。 ・ポルトガル滞在中は各自簡単なジャーナルを作成し、学びのプロセスを記録する。
事後・報告会	Post-mini Survey*	・事後サーベイを実施し、現地での学びを分析する
	企画・準備	・コレクティブインパクトにつながるものになるよう、参加メンバーで、企画・準備していく
	報告会の開催	・広く今回の学びを国内に届け、報告会後には、同様の興味や課題感のある人たちとのネットワーク構築を目指す
	中間まとめの執筆	・「教師・大学関係者が創るみらいの海外研修」の参加者で振り返りを行う。 ・中間まとめを執筆し、未来への示唆として残していく。

*サーベイの回答（記述）は、本スタディツアーの参加者（8名）で共有し、参加教師・研究者・大学関係者自身が、自分たちの変容とその要因を、記述された回答を見ながら、対話を通じて分析した。

（事前）
https://forms.gle/8FXr2CkCD7oEvH9q9

（事後）
https://forms.gle/M6jDCLstLTHwmgUP9

2. 日本からの参加者

生徒2名、管理職1名、教員2名、研究者1名、事務局2名

（2025年5月時点での所属・役職）

Name	Organization	Title	Main Interest　主な興味（事前）
高橋　惺	輪島高等学校	生徒	ポルトガルの生徒の生活Student life in Portugal, 年齢、学年、学校種を超えて、生徒たちがどのように交流しているのか How students are interacting each other beyond age group/grade/school types
崖　顕	輪島高等学校	生徒	ポルトガルの文化、日本とポルトガルの教育や生活の違い Culture of Portugal, difference between Japan and Portugal in education and life 野球部なので、ポルトガルの生徒たちとキャッチボールがしたい He wants to play baseball (catch ball) together with Portugees students
平野　敏	輪島高等学校	校長	シティズンシップ教育Citizenship, （復興を目指す）地域のハブとしての学校の役割 School as a hub for regional development and creative recovery from the earthquake and flood
大達　雄	小津中学校	主任教諭	シティズンシップ教育、ビジョン創り、 Citizenship, Vision Making, 学校の自由裁量、教師のウェルビーイング School autonomy and curriculum flexibility, Teacher wellbeing,
山本　佐江	育英大学	教授	アセスメント、教師教育、特別支援教育 Assessment, Teacher education, Special needs education
荒　康義	郡山高等学校	副校長	シティズンシップ教育Citizenship, 学校の自由裁量School autonomy and curriculum flexibility
荻上　健太郎	東京学芸大学	准教授、日本OECD共同研究	国際連携International partnership/collaboration, 新しい国際的な教員研修 New overseas teacher training
太田　環	東京学芸大学	日本OECD共同研究	国際連携International partnership/collaboration 新しい国際的な教員研修New overseas teacher training, 教師の負荷を軽減するためのシステム基盤 Infrastructure/system which help teachers' admin work

3. プログラム日程（予定）：2025年4月27日（日）～5月3日（土）

4月27日（日）　日本出発、ポルトガル（リスボン）着
4月28日（月）　リスボンで集合し、モイメンタダベイラに陸路で移動
4月29日（火）　学校視察
4月30日（水）　午前：打ち合わせ、午後：国際ワークショップ＝＞学校視察

5月1日（木） 振り返り
5月2日（金） 移動・日本へ出発
5月3日（土） 日本に帰国

＊2025年4月28日、イベリア半島（スペイン・ポルトガル）で発生した大規模な停電により、大幅な予定変更となった。グループの内3名は経由地のパリで足止めとなり、4/30の夕方に、現地入りができた。

4. 訪問校の情報

Moimenta da Beira School Cluster（ポルトガル北部ヴィゼウ地区にある人口約1万人の自治体Moimenta da Beiraにある学校クラスター）

連絡先：**Ms. Maria da Conceição Mendes Pinheiro**
Principal, Escola Básica e Secundária de Moimenta da Beira
Rua Doutor João Lima Gomes, n-º3
3620-368, Moimenta da Beira
電話番号：+351-254-520-110

Note1:ポルトガルの教育に関しての参考情報

- 2024年10月OECDジャパンでの、元教育大臣コスタ氏のコスタ氏のプレゼン（日本語版）
  https://www.mext.go.jp/content/20241206-mxt_kokusai-000038059_6.pdf
  OECDジャパンセミナーサイト：https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/oecd/1419662_00003.htm

1. シティズンシップ教育について
   (JPN) https://drive.google.com/file/d/1ZD81dIpKAh0DTGWLx87j_4Jjcxdc6RRG/view?usp=sharing
   (ENG)https://docs.google.com/document/d/1dFBFFBNJsUb_gww1fNQP5UDdsL18NJxu/edit?usp=sharing&ouid=109626894138186012492&rtpof=true&sd=true

第2部
ポルトガル生徒教員合同研修：学びや気づきのまとめ

アンケートの回答から（抜粋）：

Q1:みなさんの学校や職場で、「あったらいいなと思う学び」に関して、今回のスタディツアーを通して、どのような気づきやひらめき，腹落ちがありましたか。

- 市民をそだてるという観点から、カリキュラムを組み立てているのが、わかりやすく、よいと思った。
- 国の戦略に、学校も同意・コミットしているのが伝わってきた。
- 小中高校の校長室が一体となっており、コミュニケーションを図りやすく、迅速な意思決定ができる環境が整っていると思った。小中高の垣根を越えた学びのシステム作りを（自分たちも）推進したいと考えました。
- 教師の間でリエゾンの役割を果たすコーディネーターにたくさんお会いした。
- 一つの学校の中で様々な生徒が自然に共に学んでいるインクルーシブ教育を見ることができた。特に特別支援が必要な生徒たちについて、日本とは異なる環境であり、それにより、自然に共生できているという印象を受けた。

Q2:【 大人への質問 】今回のスタディツアーを通して 、あなたがエージェンシーを発揮するために、学校や身近な教育を取り巻く環境について、最も共感したことは何ですか。

- 教師たちのチームづくりを通して教師どうしで学び合い、子どものための豊かなコンテンツが生成される場面。
- 教師が多重層的に、役割分担・絡み合いながら、カリキュラム作りをしているところ。
- 管理職チームが同一の空間で学校クラスターに関する情報を交換でき、子どもの発達を見通した垂直の関係性ができるとともに、クラスター全体では管理職のリーダーシップが合理化されること
- 障がいや言語的な不自由さががあろうとなかろうと、当たり前に一緒に学ぶこと
- 自国の歴史をしっかり振り返っていたり（カーネーション革命など）、多様な背景を持つ人たちをしっかり理解しようとしているのを教育の仕組みから感じ取れた。
- 自国を知り他国を理解するということもエージェンシーを発揮するために必要だと改めて感じた。

Q2:【生徒への質問】：今回のスタディツアーを通して、先生と生徒の関係について共感したこと（その通り！そうだよね！と思ったこと）や、いいな、と思ったことはどんなことですか。

- （生徒と教師が）親子のように接していたのがいいと思った

Q3:今回のツアーを通して、「先生のウェルビーイング」のために、「やめてよいのではないか」や「技術（**AI, ICT**など）でおきかえられるのではないか」と思ったことがあれば、具体的に教えてください。

- 生徒と先生という壁が日本では高すぎるような気がします（生徒）
- 職場をもっと楽しく、堅苦しい感じをやめればいいと思った（生徒）
- 週のうち１日在宅勤務は、日本でも取り入れていければと思う。
- 職員室は書類を積み上げてパソコンに向かう場所であるという教員の意識を捨ててよい。
- 教員の仕事場は教室でありグラウンドであり、職員室は休憩する場で情報交換する場であることを実感できるような環境整備が必要であると感じました。
- 事務机の上に、荷物で埋もれた職員室での仕事

Q4:【大人への質問】今回のツアーを通して、教師エンゲージメント（矜持、プライド）を最大限に引き出すために、あなたが大切と思った要素を、一つだけ、最優先事項としてお書きください。

- 教師の同僚性が豊かであること
- 学校全体の自律的在り方が、個々の教師のカリキュラムデザインを後押しするシステム
- 教員の協働によりカリキュラムや授業を生み出すこと
- あそびこころ
- 生徒との直接のやり取りの大切さ

Q5:今回のスタディツアーを通じて、学校は地域のハブとしてどのような価値を創出できる可能性があると感じましたか。

- 日本でも気軽に行ける子供の居場所ができると感じました（生徒）
- 新しいコミュニティを作ることができる（生徒）
- 保健室を開放しているなら地域の人々が受診しやすくなる（生徒）
- 学校は、良き市民・良き未来をつくる人間を育てる役割があることを、改めて学校も地域も認識して、多様でインクルーシブな社会づくりのベース基地・基盤になれるのではないかと思った。
- 地域の方々が積極的に学校行事や学校運営に関わる機会を設けることで、地域全体で子どもを育てる意識の醸成が図られると感じました。
- 成人教育も組み込んで生涯学習における地域コミュニティの中核として存立しうること

- 学校が子どもたちの学びの場であると同時に、移民・高齢者・社会的に困難を抱える人々にとっての学び直しの場や、生活の支えとなる空間になっていることや、地域の祭りに際して自然に大人たちと生徒が混ざり合う場になっていることが感じられた。
- 生徒だけでなく地域全体の協働や学びができる場として

そのために、日本の学校や先生に，どんなことが必要だと感じましたか。

- 柔軟性（生徒）
- 地域でつながることの価値を見出し活力を持つこと（生徒）
- 先生自身が、未来創りをしてみる体験から、その意識を持つこと。
- 仕事に追われて休日も学校で仕事をしなければならない環境を改善し、校外でさまざまな人と触れ合う時間を増やすことが大切だと感じました。
- チームだからこそ成しえた成功体験を積み上げること
- 週に1日など定期的に、地域の中にいるもしくは地域と関わる機会を持てるようにする。
- 先生方がより良い環境、教育、コミュニティなどを作っていくことができるという意識とそれを支える学校文化を醸成していくこと。

Q6:今後，海外スタディツアーを企画する場合に、改善したほうがよいことを教えてください。

- 関わる人と早い段階でやり取りできるようにしてほしい
- 準備期間がもう少し欲しかった。特に、生徒同士が仲良くなるための事前の時間も取りたかった。whatsappでのやり取りは情報共有の点で、良かった。緊急時以降、保護者もwhatsappに入った。
- サイバーテロなどの不測の事態に備えて、今回のようにいくつかのパーティーに分かれて向かうのが適切であると感じました

Q7:今回のスタディツアーの感想やコメントなどを自由にお書きください。

- 参加者と関係者が力を合わせて、困難を乗り越える・レジリエンスを発揮する機会になりました
- 停電でパリからの航空機が足止めされた時、キャンセルしてパリでのホテルを探そうとしたのですが、生徒が「自分たちは電気はおろか、食べ物も水も寝るところさえないところで何ヶ月も生きてきたんですよ。自分たちだからこそ伝えられるものがあるはずです。みんなを元気づけてあげたいです。行きましょう！」と言ってくれてPosttraumatic growthを感じました

（振り返り会から）

- ホームステイの家族が（自分たち・日本に）興味を持ってくれて、いろいろ質問してくれたので、うれしかったし、英語をしゃべることができた。
- 学校では、あえて違うものを前に出し、触れさせている印象があった。
- 日本の障害者は独立、一人でなんでもできる（白杖を使ったりして自力で）ことを求められるが、ポルトガルは頼ってもよい、ということが前提になっていると感じた。

以下参考：具体的な学びの詳細

学校のカテゴリー：以下の記号で記載

学校のカテゴリー	記号	校舎（番号は仮。同じ番号の学年が同じ校舎に入っていた。
幼稚園	幼稚園	1

1stサイクル (小1～4年)	1CL	1
2ndサイクル（小5，6年）	2CL	2
3rdサイクル（中1～中3）	3CL	3
High school（高校）	HS	3
職業訓練校	VET	3
adult education（生涯教育）	AE	3

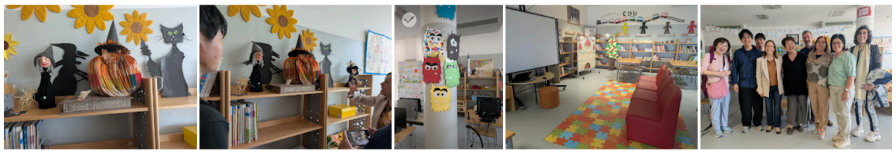
1．学校概要・学校クラスターに関して

Agrupamento de Escolas de Moimenta da Beira – Site das escolas de Moimenta da Beira

内容	コメント・気が付いたこと・疑問など
生徒（幼稚園から高校）1200人、教師200人 1クラス20名程度	生徒当たりの教師の数が多い
Moimenta村の人口7000人だが、近くの村からも子供たちがかよっており、総人口は3万人ぐらい？	
3つの校舎に分かれていて、幼稚園・CL1は改装工事完了。 他は、改装工事中 各校舎（校庭）の入り口は施錠されており、ガードマンがいる校舎も。先生の申請を経て、生徒たちは行き来・交流をしている。	
学校のクラスター化は20年ほど前に、政府の方針で実施されたとのこと。	
学校のビジョン：民主主義・インクルーシブ・inter-cultuality, diversity 「自分とは異なる人たちがいる」ことの理解促進につながる取り組みを推進しており、民主主義・インクルーシブ・inter-cultuality、diversityを象徴した生徒たちが作った展示も、多く飾られていた。  例：小学校の壁の掲示	異なる人がいる、ということをあえて積極的に伝えているイメージ。 日本では違いがあることを隠そうとする？ 例えば、先生からの紹介の一言目が「She is Brazirian.」とかも意外だった。 （特別支援においても同様）
カーネーション革命（Revolução dos Cravos）：1974年4月25日にポルトガルで発生した独裁体制崩壊の革命。銃にカーネーションをさしていったことからカーネーション革命と言われる。民主主義の大事さを示すため、幼稚園・1CLの校舎の壁に、子どもたちの手形でとったカーネーションと銃の絵が描かれていた。	歴史的な転換点を自然な形で教育分野に浸透していることが心に残った。

  4月25日に全ラジオで流されるという革命の歌も披露してくださった。これを聞くと、ポルトガル人は特別な感情になるとのこと。	
EUとの連携： EU+の多くの国と協定を結んで、各学校から生徒交換留学が盛ん。毎年各国の学校から4名？が継続的に来る・送り出す？ 生徒の家族もホームステイの対応になれている。自分のこどもを受け入れてくれたホストファミリーの生徒を、受け入れるなど。   ERASMUSなど、多くのcertificateを受けている学校のよう。	実際のホームステイを経験した生徒さんたちの声も聞いてみたい。 多様性をあえて作り出している仕組みだと感じた。
給食が食堂で提供される。メニューは1種類。3校舎とも同じメニューを提供。費用：教員4ユーロ、生徒1ユーロ 	日本でも義務教育では給食があるが、高校からはそれぞれに任せられる。しかし、昨今のヤングケアラー等の問題や多様な家庭状況を鑑みると、日本にも必要ではないかと感じた。
給食が提供できれば、学校はある。給食が提供できなければ、学校は休み。4/28の大停電の時も、食堂がオープンしていて、給食が提供できたので、学校はやっていたとのこと。 ※土日も食べられる　とのこと	輪島高校も同様。被災後に小中の生徒を受け入れたときも、昼食の提供の可否が学校再開の条件だったとのこと
長期休暇中も、一部の生徒（家庭で食事をとることが難しい生徒など）のために食堂はあいている。	
図書館は3つある(1CL, 2CL, 3CL&HS)。明るく対話しながら学ぶ場。生徒とデコレーションを考えて装飾。教師が、各図書館の責任者も務めていた。 歴代の国王についての本の掲示や、歴史的に功績のあった方をテーマ	生徒の作品が学校の教育ビジョンに合わせてとても工夫して展示されている印象。 読書をする場というよりも、展

にしていた図書館の1つなど、歴史に目を向ける工夫がなされていた。人名もローマ皇帝でポルトガルを征服したアウグストゥスや、ギリシャ神話の水の精オンディーヌ由来の名前があった。 バスツアーで、各所を紹介していただく中で、レコンキスタやルシタニアという言葉をよく耳にした。ルシタニアとはローマ時代のことかと訊ねると肯定した。	示・交流・上映・学び直しの多目的スペースとして機能しており、子どもと大人（社会人教育の方）がともに学ぶ開かれた空間 ギリシャ・ローマ時代への憧憬を感じた。初対面の挨拶で名前について触れると嬉しそうだった。 また、ムーア人から領地を回復したことも誇りにしていた。ローマ時代の古い国の呼び方も口葉に上っていた。
3CL/HS：人権＊にかかわった人たち（例：ネルソン・マンデラ、キング牧師など）の掲示と、多様な文化の掲示。生徒と図書室の先生が作成。 	＊シティズンシップ教育のフォーカスの一つ
1CL：読書クラブの発表を見学。英語の先生が今年度は読書クラブの責任者。 特別支援の必要な子が、本の内容を発表。ポケットから、いろいろなものが出てくる本の説明なので、支援の先生がサポートに入って、絵本を模したポケットのついた服と、ポケットから出てくる小物も準備。  	先生のサポート素晴らしい ここでも「彼女はスペシャルニーズの生徒です」と全体に紹介されていたのが印象的。

 ソファーに座って発表。 エコを意識したリサイクル用紙の装飾なども生徒が作成していた。 テーブルゲーム（地図や、数字などを学ぶもの）も多数置いてあり、図書館で遊びながら学べる。 	
ビデオ編集室。設備は教育省から送られたとのこと。どの学年でも使用可能。3Dプリンターもあった。 	シティズンシップ教育のプレゼンビデオ作成などに活用されているとのこと。

2. 先生の働き方・同僚性

内容	コメント・気が付いたことなど	カテゴリー
職員室にカフェコーナー（プリペイドで支払い） 	職員室・カフェコーナーが、気軽な情報交換の場になっている。 カフェコーナーは地域の方が店員として常駐 先生たちはよく飲みよく食べよく話すことで英気を養っているように思えた。この場所ならインフォーマルな会話が弾み、仕事の愚痴や相談もできて、ストレス発散になりそうだった。	すべて
校内では、校長・施設責任者・各部門のリーダーが1室で日常的に協働 headmasterの隣の部屋に、各学校のvice principal4人	コミュニケーションがとりやすい。 学校間の連携がとりやすい	建物は＃3内

が同部屋に隣り合って座っている		
平均的な勤務時間（週当たり） 22時間＊：授業＠学校 2時間＊：ミーティング＠学校 9時間：家でも学校でもよい ＊週24時間は、学校にいる必要がある 勤務時間：8:30-17:15 Ondinaの場合： 20時間：授業＠学校 4時間：コーディネーターの仕事 3時間：ミーティング 2時間：演劇の指導も ほか？ ちなみに、夏休みは学年の切り替わりのタイミングでもあり、生徒は2か月（7，８月）、先生は1か月とれるとのこと。	生徒と関わる時間／準備の時間を明確に区分け 自宅で仕事が可能な時間も保障されているが、それでも学校で処理する時もあり、教育職の多忙さは日本と同じだと思った。 教科を教える責任だけでなく、人と人、人と組織をつなぐ役割を果たすコーディネーション・リーダー的立場の人が複数配置されていたことは、教育で何が価値づけられているかを表していると思った。	すべて
一人の先生が、担任、コーディネーターなど、複数の役割を担い、教師がチームとしてカリキュラム作成にあたっている。これは、2017年にコスタ氏が教育大臣になってから始まったとのこと。（教師全員が納得して、そのように動いているわけではないとの話もあった）		すべて
ポルトガルの歌、カーネーション革命の歌も聞かせてくださった。歌ったのは、先生。 電子ピアノを弾いて歌ってくださった音楽の先生は成人教育の担当。公立の学校で多面的な学びが可能で、生涯学習が保障されていた。  	学校が地域のハブとして機能するには、子どもたちだけでなく、大人も含めて、学び直し、学びほぐし、新奇な学びなどの機会を提供することが重要だと思った。	

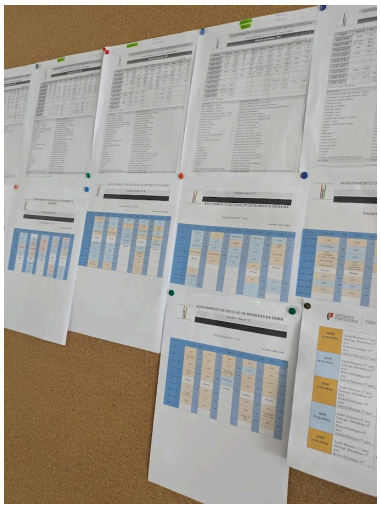
3．シティズンシップ教育

内容	コメント・気が付いたことなど	カテゴリー
シティズンシップ教育のコーディネーターのアリス先生は英語ができないため、2023年に日本に来たマリアナ	第一外国語にしただけで、英語ができるようになるのだろうか？	

が通訳（ポルトガルでは、昔はフランス語が第一外国語だったため、多くのシニアな先生たちは英語ができず、生徒たちが通訳をしてくれた。サイエンスの先生、アートの先生も同様） 	卒業して大学進学後ではあるが、生徒の英語力が高く通訳がこなせるレベル シティズンシップ担当の先生は、コミュニケーション能力が高く、ポルトガル語はよく理解できなかったが、Alice先生の周りは、いつも笑い声で溢れていた。彼女は、息子が医師、娘が薬剤師。ICT関係も強く、機械の調子が良くない時や映像室で積極的に関与していた。そういうマルチな方が、担当として適任として選ばれるようだと思った。	
・シティズンシップ教育は、2017年から開始 ・ https://drive.google.com/file/d/1CmEmm-NK8eYfE4uMcFXVf8Xktt3G9e3U/view?usp=drive_link ・Moimenta校では、**human rights/diversity/climate change/arts/wellbeing**にフォーカスしている。１年を通して、教科・教科以外でもこれらに関するカリキュラムをデザインして、実施。 ・学校外とのパートナーシップは生徒のニーズにより提携 ・シティズンシップは教科及び教科横断で実施 ・トピックによっては、クラブでも実施 ・Pre-school/1CL：教科としての実施はない ・2C/mid school：教科として1hour/week必須。すべての教科につながるようにデザイン。 ・adult educationでは、移民にも適用できるように進めている。adult educationは、言語・技術・アートにフォーカス。 ・移民や、成績のあまり良くない子をインテグレートするときに、アートは効果的 ・評価：どのようなcitizenを育てたいのか、という観点で重要度（どこに重きをおいた評価基準にするのか）を生徒・教師で話し合い。作成された評価基準は、HPにも掲載されている。	様々な国の生徒がおり、出身国のことなどを紹介する学習も生徒たちが発表してくれた。例：ウクライナのこと。ロマのこと。 小学生は環境（ゴミ問題）についての歌を作成し動画化してPRする活動も行っている。 国家という体をなしつつ、汎ヨーロッパ的な学びも進められている。ヨーロッパ人としての自覚や一体化。	
  生徒たちの実践例：	多様な背景を持つ生徒たちがおり、それぞれの生徒たちが、自分たちについてしっかりと発信していることがとても新鮮であった。	

・5年生：環境に関してのビデオ作り。教科横断、インクルージョンも視野に ・多文化理解の促進（自分の出身国ウクライナや、この学校で困っていることをビデオで発信。フランスからポルトガルに戻ってきた生徒も同様に自分とはだれで、どのような困り感があるか、などをビデオで発信。ジプシーの文化を探究している生徒もいた） 学校におけるインパクト調査：ボードメンバーが、次の活動のために、インパクト調査を行う。		

4．インクルーシブ・特別支援教育

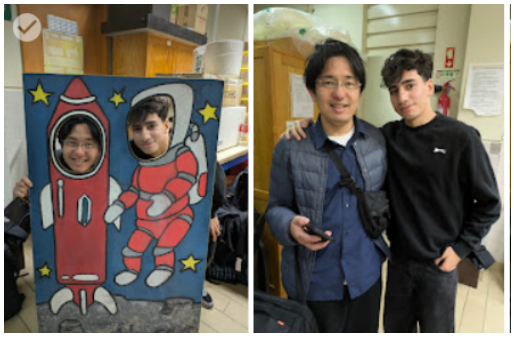
内容	コメント・気が付いたことなど	カテゴリー
スクールカリキュラムは1年通してセットされる。特別支援が必要な生徒は、スクールカリキュラム（時間割）をベースに、特別支援の必要度により、クラスに参加するか、支援室で過ごすかを、クラス担任教師と特別支援の教師が協働して決定。基本はクラスに属する。1名だけが100%別カリキュラム。  上がスクールカリキュラム・下が特別支援を必要とする生徒たちのカスタマイズされたカリキュラム（青は教室・黄色は別室で授業に参加（色は逆かもしれない）	特別支援教育の専門性をもった教師が多く関わっていると思うが、個別カリキュラムを組むに当たって、担任の役割も大きそうだと思った。ここが日本と違う？ またアシストする方もいたようだが、教師ではなくてTAか？ 校内委員会を設置するように義務付けられていると思うが、これに関しては聞けていないので、尋ねなくては。 カウンセラーなど心理職の方々の関わり方も。 インクルーシブ教育は、シティズンシップ教育と連動して、全人教育だと思ったが、日本より認知的側面の進捗も重視されているように感じた。	2CL
重度障害のこどもが使うベッドや、肢体不自由児のための車いす、静かに勉強ができるへや、筋肉を鍛えるためのコーナーなどもある。	ASDの子どものためにTEACCH program が実践されている。保護者はどう関わるのか知りたいと思った。	2CL

 生活の仕方を学ぶキッチンや、シャワー室も。着替えも生徒毎に、多めに保管されていた。  TEACCH program の構成的な配置と視覚的な見通し		
上記と同様。4－5名の特別支援を必要とする生徒さんがいて、基本はクラスで過ごすことが前提（担任が責任を持つ）。1名のみ、100%特別支援の教室での特別カリキュラムが組まれていた（重度の自閉症）  筆を持てない子たちが、口で書いた絵も、部屋の外の廊下に掲示されていた。 同じく、手話や点字も、廊下に掲示されていた。 		1CL
金曜は、ホースセラピー（馬に乗る）に行く生徒も多数いるとのこと	animal therapy が実践されている事例を知ることができた。日本だと犬？	2CL

5. 学校の自由裁量とカリキュラムのフレキシビリティ

内容	コメント・気が付いたことなど	カテゴリー
national curriculumとart教育（劇、ダンス、など）との連携		
学期は、3学期制/2学期制は自由 （Moimenta2学期制）スクールカリキュラムは1年通してセット。		

7. その他

内容	コメント・気が付いたことなど	カテゴリー
訪問2日目のはじまりは、演劇をやっている子供たちがマスクをつけてお出迎え 		
サイエンスクラブ訪問： 毎週水曜午後にやっている。ロボットと宇宙にフォーカス。  2023年に日本に来た生徒さんとも再会。 		

スウィートライスの作り方を教わる。  2日目の終わりは、地元のフォークダンスと、食堂で会食。スウィートライスも。 フォークダンスはイベントで良く出されるそう。Moimenta校の生徒たちも、地元のフォークダンスチームに所属している子がいて、披露してくれた。（図書クラブで発表してくれた、特別支援の必要な生徒さんもフォークダンスチーム入っていた） 	日本の給食では、調理の人たちは給食のみしか作らないが、ポルトガルでは、スウィートライスや、パーティ料理など、いろいろなものに、対応していた。 せっかくつくったスウィートライスは、最後たくさん残っていて、どうするのだろうと思った。 フォークダンスの多彩な衣装を見ると、海洋民族としてのポルトガル人とはまた異なる豊かな農業国の一面を実感した。 モイメンタの近くは平地が少なく丘陵地帯なので、農機具も人が使う素朴な鍬のようなものが使われていた。	
   	最終日（祝日）ドゥロ川近くを案内してもらった時、山の下から上までぎっしりぶどうが植えられ、まるで段々畑のようだった。水平は機械を使いやすいが、垂直には使いにくいとのこと。畑の境目や小さな集落の道は、細かい石積みや石畳みで、August副校長は人がstep by stepで作ったと言っていた。アフリカ、バングラデシュなどからの労働者が働くことが多いそう。	
今回の滞在では、スペイン・ポルトガル・フランスをまたぐ大規模停電の影響を受け、リスボン空港では入国審査や荷物受け取りに混乱が生じた。 スーツケースを受け取れないまま移動することになり、売店も現金のみ、信号も地下鉄も止まっているなど、現地のインフラが完全に麻痺する状況を経験しました。 モイメンタのホテルに到着したのは深夜で、停電はそのタイミングで復旧。 安価な日用品を近隣の商店で調達しながら、最低限の	まさにVUCAを象徴する体験だった。 荷物なしは不便かとおもいきや、個人的には意外と快適だった。 「足るを知る」経験にもなった。	

準備で学校訪問をスタート		
ホテル到着時には停電は解消されていたが、まだ蠟燭が備えてあった。 		

関連文書:

ポルトガルとの協働にみるシティズンシップ教育の実践報告
—2040年の教育を担う若者たちへのメッセージ—　福島県立郡山高等学校　副校長　荒康義
（日本OECD共同研究中間まとめ　国際共創版に含まれる）
https://drive.google.com/file/d/1RgpND5HAzXYe98zXb0nH8dHc2WMSuilf/view?usp=sharing

日本OECD共同研究中間まとめ　国際共創版:＝＞こちら

謝辞

この訪問を提案、実現させてくださったモイメンタダベイラのAlcides José de Sousa SARMENTO校長、Augusto Emanuel Proença PEREIRA副校長、そして、Maria da Conceição Mendes PINHEIRO先生と、同僚の先生方に、心より御礼申し上げます。

また、このスタディツアーがより深い学びになるよう、ご助言をくださったOECD教育スキル局の田熊美保氏とEducation2030/2040チームの皆様にも感謝申し上げます。

参加者一同



